

平成25年度教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

参加した大学生は、昔の人の生活に興味を持つ小学生たちが参加した「子どもむかし生活体験村」を運営することを通じて、自分たちが学んだ愛媛の伝承文化を伝えるとともに、リーダーの資質や子どもとのかかわり方に関して深く学び、地域に根ざして活動しようとするリーダーとして成長しました。

1. 事業実施までの経緯

本事業は、当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや、日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、今日日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から、自然と文化の融合体験、及びそれをとおして地域に根ざして活動するリーダーを養成することを目的として、平成19年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。

7年目となる今年度も、参加する大学生の意識を高めるために、愛媛大学と連携して、前年度末より打合せを重ね、事業内容を早期から決定し、大学への広報に力を注いだ。また、24年度に引き続き、実施2週間前に、当所の担当者、愛媛大学の担当者を講師に、大学生対象の事前説明会を実施した。

小学生の参加対象は、昨年度に引き続き、4～6年生とした。小学生の広報の範囲は、愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。

内容については、「伝承文化」という側面が弱かったという前年度の課題をふまえ、「伊予竹」という名称で有名なように、愛媛地域の農村の周辺に生息し、人々の生活や遊びの道具として利用された「竹」や、四百年の歴史をもつ地域の伝統工芸である「泉貨紙」を素材に、「つくる」をテーマとして事業を展開した。その際、製作方法や安全上の留意点、舞台となる土居家に関する知識等を、講師や惣川地区の方々から大学生が学び、小学生に伝えることとした。

以上の点を考慮しつつ、関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

2. ねらい

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」の運営を自ら計画し、実施することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

4. 後 援 [後援] 愛媛県教育委員会 西予市教育委員会 大洲市教育委員会
NHK松山放送局 愛媛新聞社
[協力] 西予市野村町惣川「土居家」

5. 期 日 平成25年8月19日（月）～23日（金）
（子どもむかし生活体験村は8月21日（水）～23日（金））

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家（19日（月）
西予市野村町惣川「土居家」（20日（火）～23日（金））

7. 参加人数 大学生12名（募集人数15名）
（子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生20名）（募集人数20名）
（事業の一部で地元の惣川小学校児童4名も参加）

8. 講 師

岩本 康孝 氏（大洲市立河辺小学校教諭・初等教育研究会会員）
大本 敬久 氏（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）
犬伏 武彦 氏（元松山東雲短期大学特任教授）
菊地 孝 氏（菊地製紙 七代目「泉貨紙」職人）
西予市野村町惣川地区の方々
山崎 哲司 氏（愛媛大学教育学部教授・副学部長）
日野 克博 氏（愛媛大学教育学部准教授）
国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

8/19 (月)	9:30	10:00	10:30	12:00	13:00	14:00	16:30	17:30	19:30	20:30
	受付	開講式	アイス ブレイク	昼 食	(講義) 現代の教育	竹食器・水鉄砲づくり指導法 安全管理講習	(講義) リーダーに ついて	夕 入 浴	(講義) 子どもとのか わり方につ いて	情報交 換会
8/20 (火)	8:30	9:30	11:30	12:30	13:30	15:30	18:30	20:00	22:00	
	菊地製紙 へ移動	紙漉体験 (菊地製紙)	土居家へ 移動	昼 食 布回運 び	土居家のつくり と歴史的意義に ついて(現地研修 ・講義)	現地下見	夕 入 浴	リーダーズプログラム立案 「子どもむかし生活体験村」運営準備		
8/21 (水)	8:30	10:30	11:00	12:00	13:00	14:30	17:30	19:30	22:00	
	「子どもむかし生活体験村」 運営準備			開 村 式	なかまつく り ゲーム	昼 食	愛媛の民俗文化 について(土居 家を舞台に)	竹水鉄砲作り	夕 入 浴	リーダーズ プログラム計画
8/22 (木)	8:30	9:30	11:30	12:30	13:30	18:00	20:00	21:00		
	菊地製紙 へ移動	紙漉体験 (菊地製紙)	土居家へ 移動	昼 食	リーダーズプログラム①		夕 入 浴	リーダーズ プログラム②	ふりかえ り	
8/23 (金)	9:00	12:00	13:00	13:30	15:00	16:00	17:30			
	うどん作り		昼 食	閉 村 式	小学生帰所 大学生片付け	ふりかえり 閉講式	大学生 帰所	解散 ※受付・解散は国立大洲青少年 交流の家です。		

10. 活動内容

〈第1日【8月19日（月）】〉 国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」 国立大洲青少年交流の家職員（10：30～12：00）

参加した大学生12名の緊張をほぐすことを目的として、アイスブレイクを行った。様々な活動を行う中で、自然に笑いが生まれ、参加者同士の交流が深まった。また、21日（水）から始まる「子どもむかし生活体験村」で、小学生に「なかまづくりゲーム」を実施できるようにするためのスキルを身に付けることもできた。



「現代の教育」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（13：00～14：00）

愛媛大学教育学部教授の山崎氏が「現代の教育～リーダー村と大学教育～」についての講義を行った。今後の大学教育の方向性として、座学中心から能動的な学習であるアクティブ・ラーニングが重視されるとともに、どの分野でも必要とされるジェネリック・スキル



（汎用的能力）が重視されていることが説明

された。また、ジェネリック・スキルは、知識を活用しながら計画を立てて課題に挑戦し、問題解決能力や協働する力、リーダーシップについて考える事であり、まさに今回の事業が、前半部分の学習を活かして『リーダー』としての役割を担う、実践的な学習の場であることを説明された。実践的な学習となるために、目標設定、計画、事後の「ふりかえり」が重要であることも述べられ、大学生は、これから始まる事業の目的を明確にすることができた。

また、ジェネリック・スキルは、知識を活用しながら計画を立てて課題に挑戦し、問題解決能力や協働する力、リーダーシップについて考える事であり、まさに今回の事業が、前半部分の学習を活かして『リーダー』としての役割を担う、実践的な学習の場であることを説明された。実践的な学習となるために、目標設定、計画、事後の「ふりかえり」が重要であることも述べられ、大学生は、これから始まる事業の目的を明確にすることができた。

「竹食器・水鉄砲づくり指導法、安全管理講習」

国立大洲青少年交流の家職員（14：00～16：30）

翌日以降の竹食器・水鉄砲づくり等の活動において、刃物を用いることから、刃物を使った体験活動を実施する際の安全管理や、野外における体験活動における危険予測やリスクマネジメントについて学んだ。リスクの発見・把握、評価・分析、対処・処理、事前の準備や心構え等について考えさせた。また、翌日以降には、大学生が小学生に竹食器や水鉄砲等の遊び道具づくりを指導することから、自分たちで実際に竹の遊び道具や竹食器を作ることで、その手法や手順、安全上の要点などを確認できた。大学生は熱心に取り組み、現地で子どもたちが安全に活動できるための要点等を実践的に考えることができ、その手応えを感じていた。



「リーダーについて」 国立大学法人愛媛大学 日野克博氏（16：30～17：30）

最初に昨年度の参加者である愛媛大学教育学部の菅浩和氏が、自身の事業に対するねらいや、事業前後の気持ちの変化などについての経験談を語った。続いて愛媛大学の日野氏が、よいリーダーの条件、資質や能力、リーダーとしての心構えについての講義を行った。大学生は、これから、小学生を迎えるにあたって、どのようにふるまうべきか、改めて考え直すとともに、地域に根ざしたリーダーとして活躍しようとする意志を強くすることができた。また、後日「子ども生活体験村」を運営していく中で、講義にあったリーダーとしての資質を参照する姿も見られた。

「子どもとのかかわり方について」 大洲市立河辺小学校 岩本康孝氏（19：30～20：30）

大学生が「子どもむかし生活体験村」を効果的に運営していくために、子どもとのかかわり方について学ぶことがこのプログラムの目的である。河辺小学校の岩本氏から、子どものほめ方や叱り方、学級集団をまとめるためのルール作りの重要性およびその手法、目標の重要性やその達成のための戦略性を持つことが重要であることなど、経験に基づく実践的な内容の講義であった。大学生にとっては、実際に教育現場で活躍している先生の話聞く貴重な機会となるとともに、後日子どもたちとかかわる中で、学生たちは講義の内容についてさらに理解を深めることとなった。

〈第2日【8月20日（火）】〉西予市野村町惣川『土居家』

「紙漉体験（実地下見）」 菊地製紙 菊地 孝 氏（9：30～11：30）

交流の家を出発して最初に訪れた菊地製紙では、400年の歴史を持つ、手漉き和紙「泉貨紙」を、昔ながらの製法で作りを続けている。「泉貨紙」は、国選択無形文化財、町の無形文化財に指定されており、漉き上がった直後の二枚の和紙を一枚に合わせて強靱にしているのが特徴である。大学生は実際に菊地氏の紙漉の伝統工芸の技を見学し、そのすばらしさを実感するとともに、実際に後日子どもたちが紙漉体験をするための現地下見、実地研修、打合せを行った。大学生からは、触ってはならない場所、気をつけるポイント、トイレの場所等、配慮事項について質問が出された。

「土居家のつくりと歴史的意義について」 犬伏武彦氏（13：30～15：30）

西日本最大級の茅葺き古民家である土居家の復興に尽力された犬伏武彦氏を招き、土居家の建築構造上の特徴と歴史的背景、そしてこの土居家を保存していくことの意義について話された。大学生は、土居家の歴史的な背景について理解するとともに、希少な文化財である土居家で宿泊することが貴重な経験であることを再認識し、土居家を自らも大切に使うとともに、子どもたちにも大切に使用することを指導していくことが重要であることを深く認識することができた。



「現地下見」（15：30～18：30）

22日のリーダーズプログラム①で『むかし遊び』等をする予定の三島神社までの山道を実際に歩き、危険箇所の確認を行った。また、『川遊び』をする予定の三島神社水辺公園の河原に行き、危険箇所の確認と、活動範囲および立入禁止箇所の確定、スローバック等による救助方法について学んだ。これらの活動を通じて、子どもたちの命を守る安全管理の重要性について改めて認識し、真剣に学ぶことができた。



「リーダーズプログラム立案」（20：00～22：00）

大学生主体で実施する「リーダーズプログラム」の立案を行った。各担当で「むかしあそび」の内容や役割分担について話し合い、発表し、質疑応答をすることをおして、プログラム内容の深化と共通理解を図った。また、小学生を迎えるにあたって、楽しく、安全に、充実した生活ができるとともに、子どもたちのよき成長の場となるよう、『土居家の掟』を定め、リーダーとして、子どもたちに意識させるよう働きかけていくこと



を確認した。大学生は、いよいよ小学生を迎える時が近づき、今まで学んできた内容を再確認しながら、強い思いで団結して、立案、準備作業に励むことができた。

〈第3日【8月21日（水）】西予市野村町惣川『土居家』

「子どもむかし生活体験村」運営準備（8：30～10：30）

小学生を迎える日になり、期待と不安を胸に、大学生は小学生を迎える準備を行った。「子どもたちも期待と不安でいっぱい。私たちが笑顔で、楽しい第一印象を！」の共通認識のもと、『土居家』の清掃や小学生へのかかわり方の確認等をした。

「子どもむかし生活体験村」開始（10：30～）

「なかまづくりゲーム」（11：00～12：00）

初めて出会うなかま同士の緊張を和らげることを目的に「なかまづくりゲーム」を実施した。大学生が主導した最初のプログラムである。個人的なアイスブレイクから徐々に大きな集団にしていき、最後に全員で楽しむゲームをした。このプログラムを通じて、自己紹介も終え、自然と会話が増え、お互いの距離が少しずつ縮まっていった。



「愛媛の民俗文化について（土居家を舞台に）」

愛媛県歴史文化博物館 大本敬久 氏（13：00～14：30）

愛媛県歴史文化博物館の大本氏を招き、土居家の歴史、建築素材や工夫されている昔の智恵や技について、実際に土居家のさまざまな箇所を回ることによって説明していただいた。その際、大学生は昨日犬伏氏から学んだことを小学生に話す姿も見られた。子どもたちは目を輝かせて、初めて見る昔の建物や、昔ながらの生活の工夫について学び、この建物を残していくことの重要性や、ここで宿泊できることの希少性に気付くことができた。



「竹水鉄砲作り」（14：30～17：30）惣川地域の方々

惣川地区の方々の指導のもと、班ごとに分かれて、大学生が、19日の演習で学んだ技術や、安全上の留意点を小学生に伝える形式で実施した。竹水鉄砲、竹馬の製作にあたり、刃物や、竹を曲げる際に使うバーナーの扱い方については、細心の注意を払うよう心掛け、小学生に作り方を伝えた。製作途上でなかなか思い通りにいかない子どももいたが、大学生や惣川地域の方々の指導で、上手に作る事ができ、作り終わった後は、子どもたちは、土居家の周りで、楽しく遊ぶことができた。



「リーダーズプログラム計画」(19:30~21:00)

小学生に秘密にしていた翌日のプログラムを、大学生が、晴天時の場合、雨天時の場合ともに発表した。その後、班ごとに集まり、これらのプログラムを安全に楽しく、充実して実施していくために、小学生が、それぞれの個人の目標、班の目標を立てて、全員の前で発表し合った。小学生は、大学生が用意してくれたプログラムをととても楽しみにし、翌日が待ちきれない様子であった。

また、小学生は一日のことを日記に書き、大学生は班のすべての子どもたちの日記に返事を書いた。



〈第4日【8月22日(木)】〉西予市野村町惣川『土居家』、菊地製紙、三島神社周辺

「紙漉体験」 菊地製紙 菊地 孝氏(9:30~11:30)

20日に下見と打合せに行った菊地製紙へ、子どもたちとバスで移動し、本格的な伝統工芸である「泉貨紙」の紙漉体験を行った。菊地氏の指導のもと、子どもたちは厚さや模様等、思い思いの和紙づくりに挑戦した。大学生は、スムーズに活動できるよう、小学生の和紙づくりの補助をした。子どもたちは初めて自分で作った和紙に目を輝かせ、漉いた和紙が乾いていく様子を真剣な目で見つめ、次々とオリジナルの和紙を作っていくなど、貴重な体験となるとともに、本物の伝統工芸に触れることで、その奥深さや、残していくことの大切さを学ぶことができた。



「リーダーズプログラム①」(13:30~18:00)

場所を三島神社に移動し、大学生が主体的に内容を考えたプログラムを実施した。土居家から三島神社までの山道は急な下り坂が多かったが、道中の危険箇所では、20日の「現地下見」で学んだことをもとに、大学生が子どもに注意を促すなどして、安全に目的地まで移動することができた。到着後は大学生の指導で、『むかしあそび』を実施した。まずは21日につくった竹馬でどこまで歩けるか競ったり、「しっぽとり」や「すいか割り」をしたりするなどして、楽しく遊ぶことができた。小学生の中には遊びのルールやコツを知らない者もいたが、大学生の分かりやすい説明や優しい心掛けにより、自然に集団の中に入っていくことができた。小学生にとっては、学校以外の場所で、普段あまり経験することができない異年齢集団での遊びを一緒に楽しむことができたという点で、貴重な活動となった。

次に神社の近くを流れる川に移動し、「川遊び」を行った。遊ぶ前には大学生は小学生にライフジャケットの確実な着用を指導し、水難事故防止に努めた。川遊びでは、水を掛け合う者や21日に作った水鉄砲で遊ぶ者、箱眼鏡で川の中の生物を観察する者など、それぞれが思い思いに遊びを楽しんだ。その間、大学生は小学生と一緒に遊んで楽しみながらも、20日の現地下見における打合せで割り振られたポイントに立ち、小学生を監視するなど、役割分担して安全に留意して指導す



ることができていた。川遊びの終了後は、小学生も大学生もその多くがずぶ濡れになっていたが、みんな充実した表情をしていた。



「リーダーズプログラム②」(20:00~21:00)

大学生と小学生と一緒に過ごす最後の夜には、大学生が内容を考えた『提灯ハイク』を実施した。和蝋燭を用い、むかしの人たちが夜に頼りにした灯りで、真っ暗な惣川の道を散策するプログラムである。参加者は、街灯が少なく暗い中、「提灯」の灯りを頼りに肩を寄せ合って夜道を歩いた。大学生が班の前後について歩いたりするなど、安全面にも配慮して実施できた。また、土居家に到着すると、土居家がきれいにライトアップされており、子どもたちはその壮観な光景に見入るとともに、この2日間のことを振り返り、部屋に戻って日記を書いた。大学生は班のすべての子どもたちの日記に返事を書いた。



「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏(21:00~22:30)

愛媛大学の山崎氏が、これまでの活動について「ふりかえり」を実施した。これまでの活動を自らが立てた目標に則してふりかえり、自己評価とともに他の仲間たちを相互評価していく形式で行った。大学生は、仲間の長所を互いに語りあうこととおして、自分に自信がついたという大学生が多く見られた。



〈第5日【8月23日(金)】西予市野村町惣川『土居家』及び野村少年自然の家

「うどん作り、竹食器作り」惣川地区の方々(9:00~12:00)

最終日は、惣川地区の方々の指導のもと、「うどん作り」と「竹食器作り」を行った。うどん作りでは、生地踏みや製麺機を使う作業を体験した。竹食器作りでは、竹椀と竹箸作りに熱心に取り組んだ。自分たちで作ったうどんを、自分たちで作った食器で食べる小学生の顔は、達成感と成就感に満ち、おいしそうに食べていた。大学生も、19日に学んだことを活かし、安全面に留意して活動を補助することができた。



「子どもむかし生活体験村」終了(~13:30)



小学生は全日程が終了し、大学生より先に帰宅した。別れる際に、小学生から大学生に感謝の気持ちを込めた歌と手紙のプレゼントがあった。小学生から大学生へ、感謝の気持ちを素直に表現したこの行為に、思わず泣いてしまう者が大学生にも小学生にも少なからずいた。大学生と小学生が、3日間の事業をとおして、強い信頼関係を築いていたことを感じる瞬間であった。

小学生は交流の家に戻り、保護者とともに「解散式」をした。松岡所長は、あいさつの中で、子どもたちの成長にとって体験活動が重要であること、そしてこの貴重な経験を活かして欲しいと述べた。その後、2泊3日のこの事業の写真等を用いて、子どもたちの様子を保護者に伝えた。

「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 日野克博氏（15:00～16:00）

5日間の活動を振り返っての「ふりかえり」を行った。大学生が事前に立てた目標を達成できたかどうかを自己評価した。第1日目に記入したワークシートを参考にしながら振り返ることで、自分自身の変容に気がついた。充実した5日間を送れていたということが伝わってくる時間となった。

11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

*満足：90.0% *やや満足：10.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%
○ 勉強になりました。 ○ いろいろなことが出来て楽しかった。

【大学生】

*満足：91.7% *やや満足：8.3% *やや不満：0.0% *不満：0.0%
○ こんなに感動するものとは思っていませんでした。 ○ 学ぶことが多く、とてもよかった。

12. 成果と課題

【成果1】参加した大学生に成長が見られ、大学生自ら分析できたこと

子どもと接するまでの研修や、実際に子どもと接する中で、子どもを指導する際の技術的な面や集団で自らの役割を果たすことや積極性の重要性等を学び、学んだ事を実践するとともに、自らを振り返り、出来たことや不十分であったことなどを、分析することができていた。事業後のふりかえりでは、全ての学生が、自分自身が「変わった」と回答し、この事業を踏まえた今後の目標や、この体験を踏まえた理想のリーダー像について具体的な記述が見られた。

事業前と事業直後に、この事業の目的であるリーダーの養成という一側面に照らした変化を数値的に把握するために、「社会人基礎力」自己診断シートを用いた。そのスコアは下表のとおりである。

分類	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力					
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見能力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	コントロール
事前	3.50	3.17	3.50	2.92	2.75	3.17	2.75	3.50	3.67	3.58	4.08	3.58
事後	4.08	4.00	3.83	3.58	3.67	3.58	3.83	4.17	4.17	4.17	4.33	4.00
差	0.58	0.83	0.33	0.67	0.92	0.42	1.08	0.67	0.50	0.58	0.25	0.42

参加した大学生は参加前から概ね自己評価が高かったが、上記のとおり、全ての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。特に、大学生がそれぞれの役割を果たして、事業を企画して運営していく中で、「働きかけ力」「計画力」「発信力」が大きく向上していることが注目される。「成長」を、自信をもって実感することができたと考えられる。

【成果2】「伝承文化を学び伝える」というテーマに深化が見られたこと

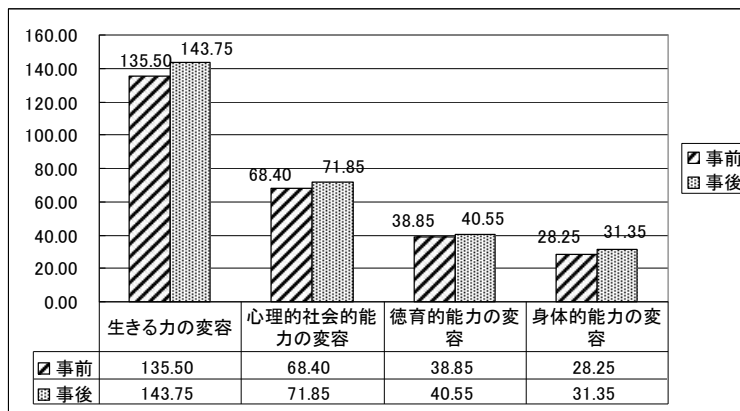
昨年度の課題として、過去6年間の中で同じような「伝承文化」に関するテーマが散見され、「伝承文化」という側面が弱かったというものがあったが、今回は、地域の伝統手漉和紙である「泉貨紙」という新たな素材に触れる等、この事業の舞台である土居家とともに、かけがえがなく、残していくべき「伝承文化」を「学び伝える」ことの重要性を、参加した大学生も小学生も理解できた。

と考えられる。

また、事業当日は、惣川地域が水不足で、水道水が十分に使えない状況であったが、皆で節水に取り組むことや、山の湧き水を利用して風呂に入るなど、「むかし生活体験」として大切なことを学ぶことができた。

【成果3】IKR（生きる力）評定用紙（簡易版） 事前事後の比較

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「IKR（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。右のとおり、全ての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。本事業との関連性を明確にすることはできていないが、小学生もこの事業をとおして成長し、自信をつけることができたと考えている。



また、今年度より初めて、プログラムの一部で地元の惣川小学校の児童4名と交流する機会をもてたことも、成果であると考えられる。

【課題1】多少のゆとりある日程にすること

小学生が合流して以降のプログラムが、少し多くなりすぎたことも改善する必要がある。「小学生に多様な体験をさせたい」との思いからのことではあるが、結果的に各プログラムに関して、「小学生が何を学んだか」、「どう集団として、自分の役割や目標に照らして取り組めたか」等を十分にふりかえることができていなかったことは、反省事項である。来年度は、もう少しゆとりある日程にし、小学生にとっても、もっと学びがあったことが分かるよう、余裕をもって事業に臨みたい。また、大学生の目標として、「子どもたちを笑顔で、たくさんの体験をさせて満足させる」ことにとどまらず、「子どもたちに、体験を通じて学ばせる」ことまで踏み込んで意識させるようにしたい。

【課題2】

今年度の大学生の参加者の全員が、「法人ボランティア」に登録した。子どもたちとの関わりを実践的に学んだこれらの大学生たちを、「地域に根ざしたリーダー」として、今後も活躍の場を作っていくことが今後の課題である。特に、愛媛大学と連携し、当所や当所が関係する実行委員会等の、子どもと触れ合う事業に積極的に参画を促していきたい。

本事業は、平成19年度から継続して実施し、今年度で7回目となる。講師の方々の熱心なご指導や西予市野村町惣川地区の皆さんの協力、国立大学法人愛媛大学等関係機関との連携があって成り立っている。これらの方々に感謝しながら、その関係をさらに深め、より充実した事業を実施できるよう努力を重ねていきたい。